

『第九の波濤』

草場 道輝 作

食料領域 上席主任研究官 高橋 祐一郎



『第九の波濤』
 著者／草場道輝
 監修／高谷智裕
 出版年／2017～2023年
 (週刊少年サンデー連載
 全237話、コミックス全24巻)
 発行所／小学館

水産学を学びに行くのは、魚や釣りが好きな人というイメージがあるようです。しかし、特段の興味も関心もなかったのに、気の迷いや出来心から門を叩いてしまい、そのまま水産の世界に浸かっていった人も少なくありません。本作品の主人公、海老原湊(えびはら みなと)もそんな一人です。

ファッション好きで、常にスマホを持ち歩く高校三年生の湊は、幼少時に死に別れた父の十七回忌で長崎を訪れ、ふと入った海辺の食堂で同じ歳の平良凧子(たいら なぎこ)に出会います。一目惚れした湊は、「水産大学」に合格したという凧子と再会したい一心から、母の反対を押し切って「長崎大学水産学部」に進学します。ところが、凧子の進学先は、鯨類研究の大家が所属する「東京の水産大学」だったのです。しかも、凧子のいないキャンパスで、入学間もない湊ら水産学部の新入生を待っていたのは、大声での自己紹介や筋トレを強要する、凧子の兄を含む逞しい男女の先輩たちでした。湊は、想像し得なかった学生生活の始まりに衝撃を受け、当初は同級生とともに先輩たちに従うものの、次第に理不尽さを感じ、ついには耐えかねて反抗します。しかし、凧子の兄から先輩たちによる言動の真意を諭されると、深く反省し、俄然として海に興味を抱くようになります。その後、新たな友達を得た湊は、外洋帆船部(セーリングクルーザー部)に入部し、学園祭の料理コンテストへの参加を皮切りに、同級生、先輩、後輩、先生、地域の人々とともに様々な体験を重ねていき、時には失敗や事故に心を痛めながらも、水産学の面白さを感じていきます。一方の凧子は、入学早々から研究室に入り浸って、乗船調査にも積極的に参加し、鯨類について深く学んでいきます。暫くして二人は再会しますが、物語の終盤まで距離を縮められない状態が続いてしまいます。

本作品の魅力は、悪者はおろか無責任な者さえ登場しない秀逸なストーリーのラブコメを楽しみながら、水産に関する様々な知識や情報を得られることです。具体的には、個性豊かな登場人物の行動や、次第に明かされる湊の父の半生などの描写を読んでいくことで、操船、漁撈、加工、養殖、餌の開発などに活用される水産学の理論や技術、水産業や水産

教育の実情、バイオロギングや洋上風力発電といった先進技術の実用化に向けた課題などについて知ることがで

きます。また、船や施設はもちろん、魚の形態や波しぶきの情感に至るまで、忠実に捉えた画も見所です。長崎大学水産学部の出身である作者が、それまでほとんど漫画や小説のテーマにされていなかった水産学部の学生生活を舞台とする物語を紡いでいくにあたり、監修者である現役の同学部教授を筆頭に、多数の人々の協力を受けながら、長崎の土地や食文化も含め、改めて丹念な取材を行ったことがうかがえます。

加えて、人の目が届かない海がもたらす様々な問題に皆で取り組む楽しさや、意見の相違や誤解があっても最後には仲間と一体になれる感覚を味わえるといった、水産学部特有の雰囲気を伝えたい作者の思いを感じます。それは、本作品中に幾度か登場する「水産放浪歌」に象徴されています。大正後期の満州で生まれた唱歌を源流とするこの歌は、学校や歌手によっては音階や歌詞が若干異なる「水産追遥歌」「蒙古放浪歌」などの別名で、全国的に派生しています。リズムやメロディーが絶妙に組み合わせられ、素面の者と酒に酔った者が伴奏なしで一体感を持って合唱できる無比の歌として知られており、多くの学校で行事や同窓会などの際に歌い継がれています。湊は、新入生歓迎会の場で初めて耳にしたこの歌を、戸惑いながら肩を組み、輪になって歌いながら、自分が直接人と繋がっていることに感極まり、思わず涙を流してしまいます。そう、湊の運命は、この歌との出会いによっても決まったのです。

本作品で展開された、昨今の水産をめぐる情勢に、作者の学生時代の経験が巧みにマッチングされた世界観は、評者のような水産学部出身者のノスタルジーを喚起させるだけでなく、今後の社会を担う世代から望まれる理想像でもありましょう。そのことは、若年層の人気を保ち続けなければならない少年週刊誌で、本作品が6年強の長期にわたって連載されたという事実が物語っています。